

イザヤ書 44 章 1 節—8 節

使徒言行録 2 章 1 節—11 節

ヨハネによる福音書 20 章 19 節—23 節

教会の芝生周りがある、丸く刈り整えられているつつじが、きれいに咲いています。春が終わり、初夏を前にして、梅雨に入る前触れでしょうか。皆様と一緒に、教会の庭を通して、季節の移り変わりを感じられないのが残念です。

本日は、聖霊降臨日・ペンテコステです。降誕日・クリスマス、復活日・イースターと並んで教会の三大祝日の一つです。クリスマスとイースターと比べるとあまり目立たない祝日といえます。聖霊という存在がわかりにくいからかもしれません。

先週、少し触れました通り、教会歴の流れの中で、本日が聖霊降臨日として位置づけられたのは、「使徒言行録」の記述に基づいています。本日の使徒書である、「使徒言行録」2章1節に「**五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると**」とありますが、この「**五旬祭**」という言葉が「ペンテコステ」です。ただしこの「**五旬祭**」は、本来は、過ぎ越しの祭りの後の50日目（過ぎ越しの祭りの二日目から数えて7週と1日）に行う、「七週の祭り（シャブオット）」というユダヤ教の祭りを意味しています。それは、過ぎ越しの祭り、仮庵の祭りとは並ぶ、ユダヤ教三大祭りの一つであり、初夏に行われる収穫祭です。

「**五旬祭の日が来て**」と短く表現されていますが、イエス様の弟子たちは、ユダヤ教徒として、収穫祭に集まっていたのでしょう。しかし、その日から集まる意味が変わったのです。つまり、その日は、主なる神様が与えられたカナンの地で、春から初夏の収穫を祝う日ではなく、イエス様を通して主なる神様を信じる人々の、新しい交わり、新しい歩みが始まった日となったのです。

「使徒言行録」が描く聖霊降臨の描写は、有名であると同時に、理性的には理解しにくい点があります。「**突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語るままに、ほかの国々の言葉で話しだした**」（使徒 2：3-4）。この描写について、実際にどのようなことが起こったのかを探求することは、困難であると同時に、あまり重要ではないと思います。むしろ、どのような意味を持っているかという点が大切です。その意味とは、先ほど触れました通り、イエス様の弟子たちが、集まる意味が変わったということです。変わった理由は、イエス様を通して、主なる神様の愛が、ユダヤ教の枠組みを超えて、すべての人にいきわたるようになったからです。言い換えれば、すべての人に、主なる神様の愛が伝わる道が、開かれたということです。旧約的な背景から言えば、主なる神様は、本日のイザヤ書で「**わたしの僕ヤコブよ、わたしの選んだイスラエルよ、聞け。**」（イザヤ 44：

1) とある通り、イスラエルを選び愛することを通して、すべての民を愛しておられました。しかし、イエス様の出来事、聖霊降臨の出来事を通して、その愛の伝わり方がより一層明確になったのです。その愛を一人ひとりもっとも深く心に刻み、この世界に伝える役割を担うのが、わたしたちの教会です。

これらのことから、聖霊降臨日は、教会の誕生日と言われることがあります。わたしたちの教会は、その日をわたしたち自身の教会の創立記念日としています。赴任してそのことを聞いたとき、少々驚きました。聖霊降臨日は移動祝日であり、毎年変わります。また、多くの教会が創立記念日を、その地で初めて礼拝が行われた日、あるいは宣教が行われた日と、固定して考えることが多いからです。それはそれで、その地になぜ教会があるのかを知るために、大切なことです。しかし、もしその点にあまりこだわり続けてしまうと、そもそも教会とは何か、という大切な点がぼやけてしまう可能性があります。それゆえ、もし、世界中の教会が、いろいろな歴史や経緯があったとしても、あえて聖霊降臨日を創立記念日にするようになれば、エキュメニカル運動も少し進むかもしれません。そのように思うと、わたしたちの教会が、教会歴にある聖霊降臨日を創立記念日にしていくことは、単純なことではありますが、大きな意味を持っていると思います。

そのように、いろいろと考えられる聖霊降臨日ですが、聖霊は、その日に初めて地上に現れたわけではありません。本日読まれた、「ヨハネによる福音書」にあるお話も、聖霊降臨の出来事の一つです。そこでは、ユダヤ人たちを恐れ、家の戸に鍵をかけて閉じこもる弟子たちの只中に、イエス様が不思議な形で現れました。そして、「**イエスは重ねて言われた。『あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。』**」そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「**『聖霊を受けなさい。』**」（ヨハネ 20：21-22）と、弟子たちに聖霊を注がれたのです。「ヨハネによる福音書」の記述によれば、イエス様の復活と顕現と同時期に、聖霊が注がれています。つまり、聖霊が降っています。

「使徒言行録」と「ヨハネによる福音書」、この二つの聖霊降臨の記述の他にも、旧約や新約の他の部分にも、聖霊が下ったことを明記する、あるいは暗示する記述があります。時代も内容も異なる、様々な聖霊降臨の出来事について、どれが正しい聖霊降臨かと問うことは、あまり良い問いとは言えません。主なる神様の息であり、主なる神様の働きでもある聖霊は、旧約にある通り、昔もあり、イエス様の時代もあり、今もあり、そしてこれからもあることを、『聖書』は、全体を通して示しているからです。それゆえ教会は、そのことを最終的に、父と子と聖霊は一体であるという三位一体の教えにまとめました。教会の暦としても来週は三位一体主日です。

三位一体という教えも、非常にわかりにくい教えですが、それは当然だとしか言いようがありません。なぜかと申しますと、主なる神様が、子なるイエス様を人間の世界に遣わされまことの愛を示し、すべての人に救いの道を開かれた。その出来事が聖霊を通して今も、これからも有効であるということ、人間が理解

しようとする、父と子と聖霊は一体であるという三位一体的に理解するしかないからです。人間の理性を超えた主なる神様の愛を、人間が理解しようとする、三位一体としか表現しようがないのです。

聖霊降臨の出来事は、「使徒言行録」にある物語が有名であり、また印象的です。日曜学校でもここを教えます。しかし、聖霊が降ったということは、三位一体的に考えることが大切なのです。すなわち、天地創造の初めから、今も、そしてこれからも働かれる神様の業の一つとして、聖霊にかかわる出来事を考えることが大切なのです。

『聖書』を離れてしまいますが、「聖霊」についてニケヤ信経は「主なる聖霊を信じます。聖霊は命の与え主、父と子から出られ、父と子とともに拝みあがめられ、預言者によって語られた主です」と説明しています。これらは、聖書の記述そのものではありませんが、『聖書』を基にしています。もちろん、先に見たとおりに、『聖書』の記述一つひとつには、それぞれの物語やもっと詳しい内容があります。しかし、ニケヤ信経は、聖霊とは、わたしたちにとってどのような存在であり、どのように信じるべきかを、教会が明確に示した言葉です。

このニケヤ信経にある「聖霊は命の与え主」は、直訳すれば「主であり命を与える（方）」となります。この中の「命を与える」という動詞は、ヨハネ福音書5章21節「すなわち、父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、与えたいと思う者に命を与える」と6章63節「命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である」にある言葉です。ニケヤ信経では、聖霊が特に命を与えると明記しているように思えますが、「ヨハネによる福音書」によれば、父なる神様と、子なるイエス様、そして霊（聖霊）も命を与えると語っています。その意味では、父と子と聖霊を通して、命を与えるお方が、『聖書』の主なる神様であり、ニケヤ信経は、聖霊も忘れないようにと語っているのかもしれませんが。いずれにしても、聖霊とは、「命」にかかわる内容であるにとらえることが大切なのです。

そもそも、「霊」は、「風、息」という意味がある言葉です。最初から「命」とかわりがあります。そして、その主なる神様の霊のとどまっている存在が、人間に他なりません。「創世記」6章3節に「主は言われた。『わたしの霊は人の中に永久にとどまるべきではない。人は肉にすぎないのだから。』こうして、人の一生は百二十年となった」とあります。「わたしの霊」すなわち主なる神様の霊があるからこそ、命があるのであり、それが取り去られるとき、命ではなくなるとこの箇所は述べています。

ただし、これは「創世記」の6章、『聖書』の最初の方の記述ですが、すでにこれは、主なる神様の本来の意味ではありません。主なる神様の本来の意味は、同じ「創世記」の1章31から2章1節「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。天地万物は完成された」にある通りです。つまりお造りになったものは、すべて「極めて良かった」のであり、またその時点で、主なる神様の霊は、人間

の上に、限定なくとどまることが前提であったのです。主なる神様の愛も、本来この前提の上にあります。すべてのものを限定なく愛されることが、主なる神様の意志です。

それゆえ、聖霊降臨とは、イエス様の十字架の死と復活を前提としたうえで、主なる神様の本来のこの意思を、あらためて示す出来事にほかなりません。すなわち、わたしたちは、本来、時間の限定なく、主なる神様の霊がとどまる存在であった、言い換えれば愛されている存在であったということです。イエス様を信じることは、その愛を信じ、本来の命の回復を信じることにほかなりません。そして、そのことにすべての人が希望を見出すこと、それを主なる神様は望んでおられるのです。

わたしたちの中には、主の神様の霊があり、だからわたしたちは生きています。そのように知る時、人間は、互いが尊い存在だと、認め合うことができます。主なる神様の息がそこに留まっているからです。そして、その先に本当の平和があるのです。そのことを改めに示すために、復活したイエス様は、今ある自分の命を大切にするために部屋に閉じこもっていた弟子たちに、息・聖霊を吹きかけて、「あなたがたに平和があるように」と語り掛けたのです。復活の希望がないとき、そして、聖霊降臨によってその希望が明確に示されないとき、死は大いなる恐怖です。しかし、恐怖であるからこそ、今の命の尊さを考えることにもなりますが、同時に今ある命に固執して、奪い合い、争い合う歴史が繰り返されるのだと思います。

昨年の聖霊降臨日もそれまでと同じように祝うことはできませんでした。今年も同じです。この形がこれからも続くとは思いませんが、昨年と今年と続き、今であるからこそ、聖霊の働きをより一層明確に受け止めることができると思います。逆説的な言い方になりますが、見えない形で礼拝と教会の交わりを続けているからこそ、見えない形で働いている聖霊をより一層、実感することができるのだと思います（本日は、見える形で映像配信をしています）。

わたしたちは、聖霊を通して、死が終わりではないという使信を与られています。それは見える形で確認できることではありません。ただ、信じることが大切です。そして、そのように信じることを通して、つねに大きな希望があることが確認されます。その希望とは、この世界が誕生した時から共にあり、約2000年前に使徒たちに起こった、聖霊降臨の出来事によって確認された希望です。そして、その希望は、どのような出来事がこの世界に起こって、変わることはないのです。

昨年もちょうど今頃、同じようなことが言われたかもしれませんが、6月は、礼拝と教会の活動再開に向けて、具体的な準備をする期間となると思います。2年目になっても、未確定な部分は多くあります。しかし、目標とするべき希望は変わりません。聖霊による交わりを大切にしながら、誰かの命を大切にすることを続けたいと思います。そして歩みを深めるために、共に祈り、み言葉から学び続けたいと思います。